

雨が降るたび声を聴く



「この辺、お墓ばかりでしょ。こんな私がお墓をつくらしたら、世の中お墓だらけになっちゃうわよ」。九十歳を超えていた本島さん(女性・仮名)は、そう言って笑いました。

初めて会った時、ベッド上からうかがうように、上から下まで僕を見ました。歩けないのだな。そう思いました。東京・湯島の天神さん下の古い木造家で、娘さんと二人暮らし。急な階段を上った二階が、本島さんの部屋です。

娘さんが仕事に行けば、本島さんは一人でご飯を食べることもできない。ではユアハウスに連れて行ってしまおう。何とか関係性をつくらなければ。いかに仲良くなっていこうか…?

しかし、僕たちよりも本島さんの方が上手です。江戸っ子の粋としなやかさを兼ね備え、知性に富んだ言い回しで妙に核心を突いたことを言います。僕たちの方が先に、本島さんを大好きになっていました。

出会って約三カ月。具合の良いときは本島さんが階段を上り、僕は後ろにつきまです。元気になるまで、下りは危険なので、お尻を

「悪さした仲」いつまでも



仲良しの利用者さんとくつろぐ本島さん(右)

つきながら。おんぶ、時々「お姫さま抱っこ」。ある日、僕を指さして「あの人も、もう五十年もの付き合いで、若いころは一緒にたくさん悪さをしたのよ」。

当時、僕は三十二歳。でも、うれしかった。密着して恐怖も共にしてきたか、がありました。これが「つり橋効果」？「また一緒に悪さをできますね！」。僕が言うと、「何、やろうか？」とニヤリ。

たくさんの「悪さ」の話をしました。すてきでくだらない時間が一生続くと思われましたが、そんな日々も終わりを告げます。本島さんの身体機能が低下。再び歩けなくなり、食も細くなっていきました。担当医師は「胃ろうにしますか？」。娘さんとも医師とも幾度となく議論を重ねましたが、結論は出ません。

そんな時なのに、本島さんは僕に「今後五十年間、

悪さするんだよね」。僕はたまらず「今、本島さんは九十四歳です。一緒に悪さをしてきたけど、もう、できないかもしれない。僕は本島さんにごう生きていきたくて、どう死んでいきたいか、聞いたことはなかった。お墓はどこ？僕は毎年、お墓参りに行く」。

本島さんは「わかってるよ」。ニヤリと笑って「海にまいてほしい。そうしたら、雨でまた下りてくるでしょ。世の中お墓だらけだからね」。僕が「雨が降ったら思い出させるつもりですか？僕は本島さんに呪われるんですね」と言うと、「それが狙いだからね」と再びニヤリ。

そして「ユアハウスのみんなに会えて、本当に良かった。ありがとうね。私のお願ひ、聞いてくれる所でしょう。このまま、自然に生きていきたいんだ」。胃ろうはしませんでした。

その三カ月後、ご本人は亡くなられて、海に。僕は雨が降るたびに、本島さんの声を聴いています。

…たくさんのすてきな方とお会いして、たくさんのすてきなものをいただいたながら、僕たちはユアハウスで生活しています。何かの折に皆さんと再会できることを楽しみにしています。

(飯塚裕久 所長・四十一歳)



小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」(東京都文京区)での実践を一年にわたって報告した。

おわり